

書籍の涉獵におもひ付きたるよし、吉田守尙書き載せたり。されば朝倉氏もまた淺加氏と同意の書僻ある人なりしこと知られけり。

○縁切宮

此の小祠は、右衛門橋の下、長町五番丁の入口なる川縁、元惣構の土居下において、俗に縁切宮と呼べり。俗傳に曰く、昔村井氏の内室甚だ嫉妬深く、それが爲め遂に病氣と成りたり。病中謂つて曰く、世に婦人の嫉妬ほどつらきはなし。實に婦人の狂病なり。死後男女の嫉妬を和らげ守らんと遺言あり。故に此の地に小祠を置きて彼の靈を祭れり。此の地村井氏の邸地の近邊なるゆるゑなりといひ傳へたり。其の實否は詳かならずといへども、縁切の名を忌みて、婚禮入興の時、古來此の往來を避けて通行するをならはしとすといへり。蓋し縁切宮と呼べども、男女の縁を結ぶ事をも祈願するにそのしるしあり。其の事を祈請する時は、夜丑の刻に往來の目を忍び、縁切の祈願には、前なる用水川を渡りて、小祠の前に至り祈念す。また縁結の祈願には、うしろなる元惣構の土居を越えて、小祠に至り祈念す

るをならはしとすといひ傳へたり。實にさる事ならんか。世人の俗傳のみなるがゆゑに、右叢祠を初めて置きたる時世等も詳かならず。尤村井氏内室の靈を祀りたりといふ事も、俗傳に膾炙するのみにて、記録等には所見なし。おもふに、嫉妬は宿痛の義にてねたむといへり。宿痛は宿憤の意なるべしとありて、男女の不和を和らげんとの本意なれば、夫婦の縁を結べる事も、夫婦の縁を切る事も、共に祈請するならんか。嫉妬は實に婦人の狂病にして、貴賤共にありし事、古今の人情なりけん。吾が皇朝の上代にも仁徳天皇の 大后嫉妬甚だしく、遂に山背國筒城岡に宮室を造り、爰に居留り給ひて薨すと、日本紀にあり。是嫉妬よりして遂に病痾と成り給ひしと聞ゆ。

○長谷川内匠舊邸

延寶の金澤圖に長谷川頼母と見えたるは、即ち内匠が事也。諸士系譜に、長谷川頼母後に内匠と改稱し、元祿四年有故、采地被沒收、越中大浦村へ在郷被命。とあれば、此の時居邸も揚地と成りたるもの也。此の地明地と成り、俗に妖物屋敷と呼び、文政年中迄空地なりといへり。



○長谷川三右衛門傳

加陽諸士系譜に云ふ。長谷川氏本國尾張、宇津宮氏の庶流にて、應永の頃三州長谷川郷を領す。是に依りて、長谷川を稱號とす。其の祖を長谷川越中と云ひ、永正の頃より織田信秀に仕へ、後信長公に奉仕せり。越中の子三右衛門、慶長二年利家卿に仕へ、初めて采地七百石を賜はる。利長卿度々加恩ありて、千二百五十石を賜はり、旗奉行を勤め、慶長十六年歿す。宇津宮兵部の女を娶り、四子を生む。長男宗右衛門は長谷川藤五郎妹婿と成り、越前東郷へ罷越し、關原合戦後越前宰相秀康卿に仕へたり。二男半左衛門新知二百五十石を賜はり、三男七左衛門は後三右衛門と云ひ、七百石賜はる。四男大學五百石賜はり、寛文四年致仕し、名を安入と稱す。二子あり。長男頼母重恒後に内匠と稱し、加恩知共千石を賜はる。元祿四年有故知行被召放越中大浦へ在郷被命、糧米三十口賜ひける處、寶永四年五月被免、本知千石賜はり、馬廻組へ被加、同年八月歿す。二子あり。長男主計重時遺跡を繼ぎ、新知共千石を賜はり、次男逸角重如父遺知の内二百石配知賜之。とあり。按ずる